自然と共にあった福島県飯舘村の生活
～原発事故が奪ったもの～

２０１１年６月１４日

村上真平

海外協力の現場で

1982 年、インドのブッダガヤにあるガンディーアシュラムでボランティアをしたことがきっかけになり、85-91 バングラデシュ、９７-200２タイ国、NGO を通して海外協力の現場に関わってきました。

この約 20 年間に渡る海外協力活動を通してたどり着いた一つの結論は「この世の中に貧しい国々があるということは、多く取り過ぎる豊かな国々があるからであり、貧しい人たちが沢山いるということは、貧欲で取り過ぎる人々がいるからである。」ということでした。

この著しい貧富の格差を生んでいるグローバル経済システムのモラルは、端的にいうと「お金のために自然を破壊することを「必要悪」として容認し、貧欲を満たすために、他から奪うことを「競争力」として賞賛する」というものです。このモラルの元に、人間の生きる基盤である自然環境の破壊と、人間同士が競い合い、蹴落とし合いをして生きてゆくということは、結果的に人間は自ら滅ぶ道を選択し、進んでいるのだということを、痛感することになりました。

私たち、人間が自滅しない生き方はあるのだろうか。私たちの子供、その子供たちが安心して暮らせる自然豊かな自然環境、健やかな社会環境を残すことができるのだろうか。南の国々の友人たちを搾取しない生き方があるのだろうか。

そう自問する中で、出てきた一つの選択が、「生命そのものである自然を壊さないで、自分が自然の一部であることを自覚し、共生する術」と「競争し、奪い合う生き方に平安はないことに気づき、協同し、分かち合う生き方」を学ぶ、エコロジカルな共同体、エコビレッジを日本の山村で始めたいということでした。

福島県飯舘村へ

２００２年４月、縁があって、福島県飯舘村の戦後開拓によっておこされた農園と里山、約６ヘクタールの土地を譲り受け、「自然を収奪せず、人を搾取しない」生き方、エコビレッジへの歩みを始めました。

それから９年間、農園里山を「なな色の空」と名づけ、様々な試行錯誤を繰り返しながら、エコビレッジのベース作りをしてきました。

- 約２ヘクタールの自然農園（水田、多種の野菜、穀物、ブルーベリーなど）
- 2004 年よりマクロビオティック（穀物菜食）レストラン
- 200８年に石窯を作り、09 年より石窯天然酵母パン工房
- 親子里山体験などの子供が自然と触れ合う場づくり、
- 農を目指す人のための１年間の研修生や、ウーファーの受け入れ
- 農産加工（30 種以上）

そして、今年の４月からは１家族３人が移り住んできて、来年からはさらに２家族が、一緒にエコビレッジへの歩みを始める予定でした。

しかし、３月１１日の夕方、大地震の後、福島原発が津波により非常電源を喪失し、原子炉を冷却できなくなったというニュースが入ってきました。その状態が続くと冷却水がなくなり、炉心が露出し溶け出すメルトダウン（炉心融解）が起こる可能性があるという。その時思ったことは、最悪の場合、メルトダウンから水蒸気爆発による原子炉爆発が起こり、チェルノブィリと同じケースになる可能性があるのだということでした。

なな色の空は原発から４５km 離れていますが、水蒸気爆発が起きれば、私たちの場所も汚染地域に入ってしまいます。そこで、原発の状況をラジオ、テレビ、インターネットで情報を調べ続けていました。１２日午前２：０５分、一号機原子炉の炉心が再び露出したという情報とメルトダウンはすでに始まっている事を反原発ネットワークを通して知り、避難する事を決意。午前３時、妻、子供たち、研修生の６人で車に乗り込み、飯舘村を後にしました。

飯舘村は、３月１５日より、異常に高い放射能汚染が記録されるようになり、事故より１ヵ月半後に計画的避難地区に指定されました。

原発を止めることは「最低限の条件」

原発に関しては２５年前のチェルノブィリ原発事故の以前から反対の立場で、その問題を考え、反対運動に関わっていました。特に、原発を運転する事によって出る高濃度の放射性廃棄物の安全な処理法も保存法も確立しないまま運転が続けられていることに対して反対していました。

３０～40 年間だけ電気をふんだんに使うために、将来の子供たちに２万４千年以上隔離保存しなければならないプルトニュームのような猛毒の放射性物資を残す。しかも、その隔離貯蔵法は技術的に確立されてない上に、その貯蔵場所さえ決まってないのです。これほど、利己的かつ、刹那的な生き方があるでしょうか。

しかしながら、原発はチェルノブィリ以降もどんどん作られ、民主党政権になってからは原発の発電を将来５０％にするといいます。その理由は二酸化炭素を出さない、「クリーンエネルギー」だからというあきれた理由です。クリーンでない放射能の問題に対しては、国も電力会社も「絶対安全」という錦の御旗を掲げ、反対運動を押さえ込んできました。

そのような状況の中で私自身は、反原発活動に、未来に希望を持てない無力感と徒労感を感じていました。「この国はチェルノブィリみたいな事故が起きない限り、本気に考えようとしないだろう」と思っていました。

そんな時、福島の原発事故がおこりました。しかもチェルノブィリと同じ世界最悪の事故レベル７です。その事故により、私たち家族は飯舘村を追われ、戻れなくなりました。今まで作り上げてきた生活基盤、人間関係、エコビレッジ建設も全て無になりました。ゼロであれば、またやり直しができますが、私の住んでいる農園の土と里山は非常に高い放射能汚染により、数十年以上使えないということが信頼できる調査で分かりました。

この私たち家族に起こったことは、「日本のある地域に起こった特別な出来事」と、殆どの人は考えていると思います。しかし、冷静に考えると、全国にある５４基の原発の殆どが活断層の上にあります。そして、地震研究者によると、今、日本は地震活動期に入ったといいます。つまり、今回福島の原発に起こったことは、他の原発で、いつ起こってもおかしくない、ということです。政府によって、任命された事故調査委員会の委員長は中間報告で、「今回の原発事故は、想定すべきことを想定していない原発の安全基準によって引き起こされた人災である」と言っています。その安全基準によって、今も原発が動いています。つまり、飯舘村と同じことが全ての人に起こりうるのです。しかも、非常に高い確率で。

私たちが心から自分の子供たち、そして、その子供たちの事を愛おしく思い、幸せに生きて欲しいと願うならば、原発を止めるということは「目的ではなく、最低限の条件」ではないでしょうか。

私は、福島原発事故災害の「証人」として、多くの人たちに「他人事では全然ないこの事実」を伝え、一刻も早く全ての原発を止めるために歩みます。そして、飯舘村で中断したエコビレッジへの歩みも、新たな出会いがある場所で、新たに出会うであろう思いを共にできる人々と、始めてゆきたいと思っています。